教育実習での取り組みについて

115j018　大　原　萌　恵

1　はじめに

大学に入り、一年生の秋から始まった教職課程も、いよいよ終わりを迎えようとしている。最初こそ多くいた仲間も、気づけば６名を残すのみである。教職課程では、教員の仕事に直接つながるものや、それ以外の場面においても有用なものを様々学んできたが、その中でも印象深いのは、やはり３週間の教育実習だろう。それまで、模擬授業などを行ってきたものの、それは実際の教壇に立つこととは全く異なり、私にとってはとても衝撃的であったことを覚えている。授業の構成などは、後に記載する指導案を参照していただくとして、本稿では、主に生徒たちとの関り等について述べていくとする。

2　実習校について

まずは、教育実習先の中学校について紹介しておく。私が教育実習に行ったのは、母校である、埼玉県新座市立第３中学校だ。第三中学校は、第１学年６クラス、第２学年７クラス、第３学年６クラスに加え、特別支援学級の８、９クラスという学校である。また、私が在学していた時とは異なり、車椅子用のエレベーターやスロープが設置されるなどの、ユニバーサルデザイン化が進んでいた。学校の脇を黒目川が流れ、隣には新座高校がある、比較的自然豊かな立地である。私が受け持ったのは第３学年で、男子19名、女子17名の計36名だった。

3　教育実習中について

まず、教育実習は大きく３つの流れに分かれていると言っても良いだろう。１つ目が１週間目で「環境に慣れる事」が中心となる期間、２つ目に２週間目の「教壇実習の開始」、そして最後に３週間目の「研究授業に向けて」の取り組み、というところだろうか。各フェーズの間には、移行のための準備を行わねばならず、色々と忙しい事は間違いない。

ここで一つひとつの課題をクリアしていくことで、実習のやりやすさが大

きく変わると言っても過言ではないだろう。

私の場合になるが、どのような工程で教育実習が進んでいったのかを、ここから記していこうと思う。

まず、1週間目だが、これは先ほど述べたように、実習校の環境になれるための期間と言って差し支え無い。しかし、一口に「慣れる」と言っても、ただ何もせずにそこに居るわけではない。ここでやらなければならない最も重要なことは、「生徒の様子を観察すること」だ。たいていの場合、1週間目（もしくは最初の数日）は授業を持たず、授業見学のみとなることが多い。その授業見学の際に、生徒たちを個人レベルで観察し、その傾向を把握しておくことが重要だと私は感じた。たとえば、よく発現する生徒や、にぎやかな生徒、国語力の高い生徒などを把握しておくこと、そして、これが大切なのだが、どの程度のレベルを理解できる生徒なのか、を把握することである。なぜなら、これが2週間目の授業計画を立てる基準となるからだ。

この生徒観察は、実際に生徒と関わることでより深く知ることができる。給食の時間、昼休み、部活動の時間は特に有効である。生徒たちは、教育実習生に対して友好的で、また、興味を持っている。積極的に声をかけていくことにより、お互いに“未知の存在”から脱することができる。三日目頃からは、それに授業の用意が加わり始める。それまでは、生徒の個性を中心に見ていけば良いが、準備が入ってくると、自然に授業を見据えた観察に変わっていくことだろうと思うので、授業中の様子はしっかりと確認しておきたい。生徒を理解する事は、授業を組み立てる際の「この言葉は通じる」「この程度の発問なら解ける」などの一つの指標になり、単元の目標を立てる助けになるだろう。

実際、この期間に話しをしていた生徒たちは、授業中も積極的に発言してくれることが多い。何かあった時にフォローを入れてくれることもあった。

2週間目に入ると、教壇実習が始まる。私は第三学年全てのクラスを受け持っていたため、当然のように時間はギリギリだ。一つの授業が終わるごとに、指導担当の先生にアドバイスを受け、すぐさま次の授業に反映していくという臨機応変さというか、順応力が試される場面であった。授業計画の段

階で、１週間目の積み重ねが効いてくる。私の場合、実習が始まる前にある程度の指導案は作っていたのだが、生徒たちが理解できる授業に落とし込む作業というのは、実際の生徒たちを見てみなければ分からないものであったことは間違いない。言葉選び一つで、理解できるか否かは大きく変わる。実際の授業中の様子などにもよく目を配っておくことだ。

さて、この２週間目で注意しなければいけない事がある。それは、授業ばかりにかまけてはいけない、ということだ。というのは、教壇実習が始まってしまうと、どうしても授業の出来などに目が行ってしまいがちになる。その結果、休み時間などの生徒たちの様子を観察できなかったり、昼休みを授業準備だけに費やしてしまったりと、生徒の様子を見ることに意識が向かなくなるのだ。しかし、その授業を構成するために最も重要なことは生徒観察なので、最終的には自分の首を絞めている事と何ら変わりない状況となるのである。私は、実際このような事態に陥ったのだが、誰かに言われるまで気づくことはできなかったので、これには本当に驚いた。

意識してからは、生徒たちとの交流をより深くしていくようにした。自分の受け持つクラス以外にも顔を出したおかげで、休み時間に生徒から手紙をもらったり、似顔絵をプレゼントされたりもした。ちなみに、このような小さな出来事が、実習の精神的支えとしては大いに役立つので、もらった際にはお守りとして持っておくことをお勧めする。

３週間目に入ると、もう授業にもかなり慣れ、緊張もせずに授業を進めることができるようになっていた。最初こそ、３週間は長いと感じるかもしれないが、実際に行ってみればあっという間である。この頃には、研究授業の準備に取り掛かるのではないだろうか。私は、研究授業の３日前からその準備を始めたのだが、ここでもそれまでの授業計画と、生徒観察がものを言うので、この点は何とかなった。要するに、観客が多いだけの通常授業と何も変わらない、というのが私の意見である。緊張は全くなかった。私の緊張は無かったが、生徒にとっては、他の先生が来るということは非日常に他ならないので、その点には留意すべきである。普段より緊張が高まるせいで、発言は減り、全体的に慎重になりやすいと感じた。そのため、あらかじめ用意していた発問をより易しい表現で言いなおし、ノートに書いたものに問題が

なければスタンプを押して分かりやすく合格判定をあげることで、生徒たちの不安を和らげるなどの工夫が必要になった。自分の授業への工夫でもあるが、私からしてみれば、生徒たちへ向けた工夫が重要であると感じた。

また、研究授業の準備をしている時、他の先生から言われたことがある。それは、「研究授業なんかより、最終日の帰りの会でどんな一発芸をするかが重要。むしろそれが教育実習のメインだ」「授業より、生徒たちとどれだけ話すかが大事」というようなものだった。これは最終日に分かったことだが、まさにその通りだと思った。これは教育実習に行く者全員が実感するはずだ。実際に自分が今までどのように生徒たちに接し、接せられていたかがよくわかることだろうと思う。

また、三週間の内には、授業だけではなく、朝の会、帰りの会、掃除監督、家庭学習ノートや「忘れないぞう」（一日の振り返りノート。他の学校では「やりとり帳」の場合も）のチェックとコメントなどの作業も入ってくる。「忘れないぞう」に関しては、生徒たちとの交流を図るには最適であったと感じた。そこで書き込んだことに対して、翌日話しかけてくる生徒もあった。

4　まとめ

生徒たちは、案外教員をよく見ている。入念に準備をしていても、授業は絶対上手く行かないし、散々な授業をしてしまうものである。けれど、生徒たちはそれでも教育実習生を見捨てたりはしない。むしろ、「へいき、へいき」と声をかけてくれるくらいの余裕はある。しかし、逆に言えば、私達がしっかりと準備をしないで、いい加減な気持ちでいれば、それはすぐに生徒たちに伝わってしまうのだろうと思う。中学生だから、とか、子供だから、とか侮っていてはいけない、と実感した。

実習は、始まる前は授業がメインのように感じるが、その実、本当に重要なのは、生徒との交流である。教職に就いた後も、それは変わらないという事を、忘れないようにしていきたい。

第３学年５組　国語科学習指導案

日　　時　平成30年６月７日㈭第１校時
場　　所　３年５組教室
学 習 者　35名
授 業 者　教育実習生　大原　萌恵
指導教諭　高野　亜実先生

１．単元名　説明の順序に着目する「月の起源を探る」

２．生徒の実態と本単元の意図

⑴本単元に至るまでの指導の系統

育成すべき国語の能力【指導事項(読むこと)】	学習内容	単元・教材名	学習活動と関連する他領域等の指導
・文章の論理の展開の仕方をとらえ、内容の理解に役立てることができる。	・科学的な内容の文章の読み取り。 ・説明の順序・図表や語句の使い方への着目。	・大根は大きな根？（１年） ・ちょっと立ち止まって（１年） ・幻の魚は生きていた（１年） ・生物が記録する科学（２年）	【話すこと･聞くこと】 三学年⑴ア 社会生活の中から話題を決め、自分の経験や知識を整理して考えをまとめ、語句や文を効果的に使い、資料などを活用して説得力のある話しをすること。 【書くこと】 論理の展開を工夫し、資料を適切に引用するなどして、説得力のある文章を書くこと。

⑵生徒の実態と本単元の意図

本学級は明るく活発な生徒が多く、全体的に物事に対する興味・関心が高い。そのため、授業中の反応は良い。しかし、問いの内容をすぐに理解できる生徒がいる反面、問われている内容を理解しきれず、的外れな回答をする生徒もいる。また、語彙力が乏しい生徒も多いため、わかりやすい言葉で補うことで、内容の理解を進めていく必要がある。

本教材は小見出しにより、全体が６つの部分に分かれている。問題提起

のある「はじめに」が序論、それまでの研究をまとめる「新たな研究へ」が結論にあたる。それらに挟まれた本論は４つの部分に分かれ、月の起源に関わる仮説について述べられているため、構成が分かりやすい。そのため、「月の起源」を知るとともに、「疑問」と「根拠」、「答え」を読み解きながら、説明的な文章の読み方を教えることができる。また、「仮説」という専門的な文章を読むうえで欠かせない語句が出てくるので、今までの研究がどのように進んできたのか、など、専門的な文章を読み解く力を学ぶことができる。

３．単元の目標

・月の成り立ちや、科学的なものの見方、研究方法に興味を持って読むことができる。（関心・意欲・態度）
・説明の順序や図、小見出し、語句の用い方に着目させ、内容をとらえる。（読むこと）
・筆者が説明に用いている語句に注意して読むことを通して語彙を増やし、語感を磨かせる。（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

４．単元の評価基準と学習活動における具体の評価規準

	ア　関心･意欲･態度	エ　読む能力	オ　言語についての知識･理解･技能
評価規準	月の成り立ちや科学的なものの見方や考え方に興味を持っている。	⑴説明の順序や図､小見出し、語句の用い方に着目させ、内容を捉えることができる。 ⑵問題提起やそれに対する仮説や検証の内容を的確に捉えている。	筆者が説明に用いている語句に注意して読むことを通して、語彙を増やし、語感を磨いている。
具体の評価規準	①「月の起源」とは何か、積極的に文章から読み取ろうとしている。	⑴①作品の構成を読み取っている。 ⑴②文章の論理の展開の仕方をとらえ、内容の理解に役立てている。 ⑵①「月の起源を探る」の文章特徴をとらえ、説明的な文章を読み解けている。	①語句の意味を理解し、語彙を豊かにしている。

5．指導と評価の計画（全５時間）

	主な学習活動	学習内容	評価規準・評価方法
1	○序論「はじめに」から、月がどの様な天体かをおさえる。 ○問題提起がどこかを見つける。	○作品の概要を理解する。 ○本文の中心となる問題提起を見つけること。	ア① オ①
2	○本論を音読し、月の特徴をまとめる。 ○自身が担当する仮説についてまとめる。	○月の特徴を掴む。 ○ 各仮説の要旨を掴み、まとめる。	エ(1)① ・学習ノートによる考察
3	○担当する仮説を模造紙にまとめる。 ○古典的仮説について発表する。	○ポイントをおさえてまとめ、文章構成の工夫を読み取る。 ○積極的に発表する。	エ(1)② ・発表資料による考察 ・机間指導による観察
4	○「巨大衝突説」の発表・まとめ。 ○「新たな研究へ」を読み解く。	○要点をおさえ、本文の構成を読み取る。 ○筆者の考えを捉える。	エ(1)② ・発表資料による考察 ・机間指導による観察
5	○序論・本論・結論を要約し、まとめる。 ○班で交流する。	○問題提起、４つの仮説の概要、月を研究することの意義について簡潔にまとめる。 ○班で読んだものの中で良いものは参考にする。	ア① エ(2)① ・作文による考察

6．本時の学習指導（本時４／５時）

⑴本時の目標

○「巨大衝突説」がどのようなものか理解し、結論部をまとめられる

⑵本時の展開

	学習活動	学習内容	指導と評価の創意工夫
導入	①５分間の漢字練習。 ②学習の見通しを持つ。 〈本時の目標〉 筆者の言いたいことをまとめよう。	・漢字練習 ・本時の見通し	・集中して取り組むように机間指導をしながら確認する。 ・本時の学習の狙いと学習の進め方を確認する。
展開	③「巨大衝突説」を担当する班の発表を聞き、ノートにまとめる。 ④「新たな研究へ」を音読する。 ⑤「新たな研究へ」を読み、内容を理解する。	・発表の傾聴 ・巨大衝突説まとめ ・音読 ・結論部の考察	・仮説の要点をおさえ、発表しているか。 ・漢字をはじめとした、文字の読み間違いなどがないか。 ◎評価場面 〈評価規準〉エ⑴② ・結論部における筆者の伝えたいことをまとめている。 〈評価方法〉 ・感想による考察
まとめ	⑥本時のまとめと次時の予告。	・学習の振り返り	・目標に沿った振り返りをさせる。

7．板書計画

「月の起源を探る」
小久保英一郎

目標　筆者の言いたいことをまとめよう

巨大衝突説

巨大衝突説

結論「新たな研究へ」
巨大衝突説は「最も有力な仮説」なぜ？
・研究は今も続いている
・新たな研究の成果により改訂されるかもしれない。

月を研究するのはなぜ？
月を知ることは、
地球を知ることにもつながる。

まとめ